教科・領域等　〔　体育　〕

６　「主体的な学び」を視点とした授業改善の実践

☞こんな実践

学習内容を理解するためにゲームを簡易化し，見付けたことや学習したことを丁寧に振り返ることにより，球技に苦手意識をもつ子供も，学習の見通しをもって友達やボールに進んで関わろうとする姿を目指した実践です。

実践学校　Ｙ学校
実践学年　５学年
実践時期　１月中旬
単元名　　「アグレッシブ バシュ（シュート）ケットボール」
学習指導要領との関連：　Ｅ　ボール運動　（１）ア

○児童が単元の見通しをもつための工夫

４年生のポートボールでは，「ボールを持たないときの動き」に，A児をはじめ，多くの子どもが不安を抱いていたため，攻守分離型の「３vs２のアウトナンバーゲーム」を設定しました。また，ゲーム中の瞬間的な状況判断からの「パスやシュートの意思決定」ができるように，ドリブルではなく，ゴールに向かってボールを持ったまま移動できるようにし，「動きの判断」に集中できるようにしました。ただし，移動中にディフェンスが前に立ったら静止しなければならないというルールを加えることにしました。そうすることで，ボールマンがディフェンスを引き寄せ，フリーの味方にアシストパスを多く出せば，シュートの機会が増えるとともに，オフボールマンがオープンスペースを見つけて走り込むことのよさを感じられるようにしました。この動きの理解ができれば，ドリブルが加わったゲームでも，「ボールを持たないときの動き」を生かし，シュートやパスの意思決定をして活動できるようになると考えました。

年度当初，「ボールを使った体育が嫌い」と担任に語ったＡさんでしたが，動き方や活動内容を理解すると，「わかった」「できそうだ」と感じ，第２時には，自らボールに関わろうとしました。そして，ボールを持っている味方プレイヤーと自分との間に守備プレイヤーがいない場所（オープンスペース）を見つけ，そこへ動くことができれば，味方からパスをもらうことができることに単元の序盤で気が付きました。

ここがポイント！

・教師が，ボール運動における子供のつまずきを予想することが大切です。
・学習内容を絞り込み，活動やルールの工夫をすることが大切です。

○前時の振り返りから，自分の考えを友達に伝えたくなった場面

「攻撃側が多いこのゲームで，より多くのシュートチャンスをつくるにはどうしたらよいか」という単元を貫く学習問題を子供とともに設定したことで，個人やチームで学習問題を追究していく姿につながっていきました。授業の終わりでは，自然と有効な動き方，位置取りが話題となり，次時につながる振り返りになっていました。そして，第４時では，前時までに習得してきた動き方が，作戦を立てる時の財産となりました。

（第４時振り返り抜粋）
今日の授業で，相手から離れて見つからないようにまわりこむと，パスを受けられる！今日はシュートを３回決めることができた！

第５時，Ａさんは，「フリーでボールを受けてシュートをする」というチームのめあてに向かって作戦を立てる際，ボールマンから離れることが，フリーでボールをもらえることにつながると気づいていたため，教師がつくった，粘土製の立体駒を「立体作戦ボード」の上で動かし，進んで友達に説明していました。

その後，作戦が成功したか失敗したかを振り返る場面では，相手チームに試合をしてみた感想を，学習問題を基にして聞く活動を取り入れたことで，自分たちの作戦のよさに気付いたり，作戦を修正したりする必要感に繋がり，チームでの対話がより一層深まりました。

ここがポイント！

・運動の特性に応じた単元を貫く学習問題を，子供とともに設定することが大切です。
・既習の中で習得した動き方が活用できるようにするために，学習問題を視点とした話合い活動を位置付けることが大切です。

☞まとめ

・つける力を焦点化させた「簡易化されたゲーム」を設定したり，気付いたことや問題意識等を共有する振り返りの時間を確保したりすることが，予想や解決の見通をもつことになり，運動に積極的に取り組み，仲間の考えや取り組みを認めるといった，ボール運動における資質・能力を育むことにつながります。